

比喩にかかわる用法における「もう」の分析 —「もはや」との対比を踏まえて—

宮田瑞穂（無所属）¹

1. はじめに

「もう」と「もはや」は、先行研究（森田 1989、飛田・浅田 1994、金 2006、박 2018）において類似性が指摘されている。実際、(1) のように同じ文脈で「もう」と「もはや」を使用した場合、(1a) と (1b) はどちらも状態変化を表すと判断される。

(1) a. 彼の病気はもう手遅れだ。

b. 彼の病気はもはや手遅れだ。（飛田・浅田 1994）

本稿では (1) の「もう」および「もはや」の用法を「時間にかかわる用法」と呼ぶ。先行研究では、時間にかかわる用法の「もう」と「もはや」の類似性を認めつつ、「もはや」は「取り返しがきかない（森田 1989: 1126）」、「以前の状態に戻れない（박 2018: 92）」という「現状不可変性（金 2006: 94）」というニュアンスを伴うという点で「もう」と異なると述べる。

一方で、関（2019）は「もはや」には時間にかかわらない (2) のような用法があることを指摘する。例えば、(2a) における「もはや」はスコットが時間の推移の中で人間から操り人形に変化したことを表しているのではない。(2b) も同様に、ロボットが時間の推移の中で人間の姿に変化して行く様を表しているのではない。本稿では、関（2019）に倣って (2) の用法を「比喩にかかわる用法」と呼ぶ。

(2) a. フォルステルが顎で助手席を示した。「こっちへ来い」スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。（関 2019: 73）（下線部筆者）

b. このロボットはもはや人間です。あなたの言葉が分かるだけでなく、心も理解します。（*ibid.*: 90）（下線部筆者）

興味深いことに、(1) に示したように、時間にかかわる用法では「もう」と「もはや」はほとんど同じ文脈に現れることができたが、比喩にかかわる用法では、「もう」の使用ができない場合がある。

¹ mythic38@gmail.com

- (3) a. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。
b. このロボットはもう人間です。

「もう」の持つ様々な用法については既に先行研究が存在する（小出 2017、宮田 2025 など）²。しかし、比喩にかかわる用法における「もう」の使用条件についてはこれまで十分に検討されていない。そのため、本稿では関（2019）の比喩にかかわる「もはや」の分析を参考に、比喩にかかわる用法における「もう」について分析を行う。なお、関（2019）は「A はもはや B である」という形式の用例を扱っているため、本稿でも比喩の形式として「A は {もう / もはや} B である」という連辞的隠喩（山梨 1988）³のみを扱う。

2. 関（2019）の「もはや」の分析

本稿では、比喩にかかわる「もう」の分析に先立ち、関（2019）の「もはや」の議論を参照する。関（2019）は「もはや X（である）」を、話題の対象があるカテゴリーから別のカテゴリーへと移行する表現として捉え、さらに X を「プロセスにおける究極的な目標点・終着点」と位置づけている。例として、(4) ではスコットが「人間」カテゴリーから「操り人形」カテゴリーへ移行していることが「もはや」によって示されているとし、図 1 のように図示する。

- (4) フォルステルが顎で助手席を示した。「こっちへ来い」スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。（関 2019: 73）

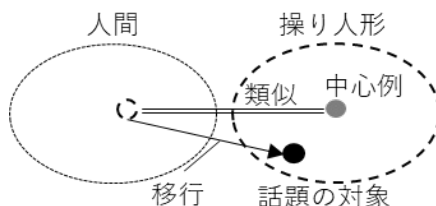


図 1 関（2019: 89）

² これらの研究では、主に「もう」の「時間にかかわる用法」、「程度にかかわる用法」、「数量にかかわる用法」について分析を行っている。

³ 山梨（1988: 16-20）はその他の隠喩の形式として (ia) のような「主辞的隠喩」、(ib) のような「述辞的隠喩」、(ic) のような「統合的比喩」、(id) のような「文脈的隠喩」を挙げている。

- (i) a. （目つきのきつい男が襲い掛かってきた状況で）狼が襲い掛かってきた。
b. 彼は夢を食べて生きている。
c. 太郎兵衛は・・・現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡がくもって、其金を受け取ってしまった。
d. そりゃね、・・・パンよりもお茶漬の味がいい年になってきている。

また、(5) の例では風の強さが「強風」「暴風」を経て最終的に「台風」という終着点に至っていることを示しているとする。

(5) 強風の中でも記念撮影！強風？いや暴風！もはや台風だよ！

(関 2019: 91) (一部省略)

以上のように、関 (2019) は「もはや X」を移行と終着点の観点から説明する。次節では、関 (2019) の挙げる用例を手がかりに、比喻にかかわる「もう」の使用について観察する。

3. 比喻にかかわる「もう」の用例

「もはや」と比較した時に、比喻にかかわる用法における「もう」の最大の特徴は、連辞的隠喩と共起すると不自然になる点である。(6) は関 (2019) が示した用例の「もはや」を「もう」に置き換えた例だが、「もはや」を使用する場合と比較するときわめて不自然となる。さらに、(7) および (8) でも同様の事実が確認される。

(6) a. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。

b. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。

(7) a. もはや採用インフラ。8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」⁴ (下線部筆者)

b. ??もう採用インフラ。8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」

(8) a. プレゼント付！8 番らーめん秋の新作はもはやイタリアン？な「クリーミートマト唐麵」！人気の野菜トマトらーめんも見逃せない⁵ (下線部筆者)

b. ??プレゼント付！8 番らーめん秋の新作はもうイタリアン？な「クリーミートマト唐麵」！人気の野菜トマトらーめんも見逃せない

一方で、「もう」に後続する名詞が「～のようだ」、「～同然だ」、「～みたいだ」などの直喩の標識 (山梨 1998: 36-38) を伴うと、文が自然となることが観察される。

(9) a. スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形みたいだった。

b. 「もう採用インフラ同然」8 割強の就活生が「企業 SNS は必要」

⁴ <https://forbesjapan.com/articles/detail/80477>, 2025 年 9 月 24 日最終確認

⁵ https://fupo.jp/article/8ban_2509/, 2025 年 9 月 24 日最終確認

c. 8 番らーめん秋の新作はもうイタリアンのような「クリーミートマト唐麵」！

(6) から (8) と (9) の対比から、「もう」は連辞的隠喩と共に起すると不自然だが、直喩とは自然に共に起することが確認できる。

さらに、(10) のように直喩の標識を伴わない連辞的隠喩の場合でも、「もう」を自然に用いることができる用例も見られる。

(10) a. このロボットはもう人間です。

b. 強風の中でも記念撮影！ 強風？ いや暴風！ もう台風だよ！

以上の観察から、比喩にかかわる「もう」を自然に用いるためには、直喩の標識を用いるか、その他文脈に何らの条件が関与していると考えられる。本稿は、この使用制限は「もう」の意味に基づくものであると主張する。そのため、4 節では「もう」の意味について本稿の規定を述べる。

4. 「もう」の意味

本稿では宮田 (2025) に従い、「もう」の多様な用法を捉えるため、「もう」は被修飾部によって導入される何らかの尺度を参照する副詞であると考えられる。なお、石神 (1978) や池田 (1999) は「もう」が時間的推移を表す点を指摘しているが、宮田の提唱する意味はこの時間にかかわる用法にとどまらない多様な用法を同一の枠組みで捉えることが出来る⁶。具体的には、「もう」は尺度を構成する要素を、被修飾部が表す p が当てはまる要素の集合と、 p に先立つ段階で p とは異なる要素 ($\neg p$) の集合に分割する。この時両集合の境界を移行点 (d_{\rightarrow}) と呼ぶ⁷。また、尺度と「もう」を除いた文の真偽が評価される点 (評価点: d_e) を、 p が当てはまる要素の集合上に位置づける。図 2 に「もう」の尺度構造を簡略化して示す。

⁶ 「もう」が尺度を参照すると想定することによって、(ia)のような時間にかかわる用法だけでなく、(ib)のような時間にかかわらない用法を統一的に説明することができるという利点がある。

(i) a. 太郎はもう学校に行った。

b. 昨日のライブ、もう最高！

⁷ 本論文では便宜上「移行点」「評価点」としているが、より正確にはこれらは点的なものではなく、時間間隔 (interval) として捉えるべきである。

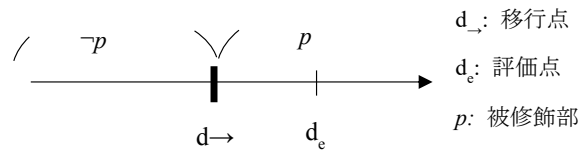


図 2 「もう」の尺度構造

ここで重要なのは、「もう」を用いる場合には2つの段階が必要であり、尺度上において別の段階から当該段階への移行が認められなければならないという点である。(11)に示すように、「もう」は現実世界で常に成り立つ恒常的な状態を表す文とともに用いることができない。これは、「もう」を用いる際に段階の移行が必須であることを示している。

(11) a. *水はもう 100 度で沸騰する。

b. *1+1 はもう 2 だ。

(宮田 2025: 34)

5. 比喩にかかわる用法における「もう」の分析

本節では、3 節の用例観察及び 4 節で示した「もう」の意味を踏まえ、比喩にかかわる用法における「もう」の使用条件について明らかにする。第一に、連辞的隠喩と「もう」が共起できる (12) (= (10)) の例を考える。これらの用例に共通する特徴は、どちらも文脈によって程度尺度が構築されるという点が挙げられる。

(12) a. このロボットはもう人間です。

b. 強風の中でも記念撮影！強風？いや暴風！もう台風だよ！

例えば、(12a) について関 (2019: 90) は「「ロボット」が「人間」に近づいていくプロセスにおいて、話題の対象である「このロボット」は「人間」カテゴリーにカテゴリー化できる基準点を過ぎていると話者が判断し、カテゴリー化している」と述べる。この指摘に従えば、(12a) は時間の経過とともにロボットの「人間度」が増すという時間尺度と程度尺度の両方が関わる文脈だといえる。(12b) についても同様に、話者は風の強さを「強風」「暴風」「台風」という順序に基づいて尺度化し、その中で当該の風の強さが「台風」という段階に至ったことを表現している。以上から、「もう」は文脈から尺度上の移行が読み取れる場合に限って連辞的隠喩と共起できるといえる。

次に、直喩と「もう」が共起する例を考える。「もう」は(13)のように、連辞的隠喩と共起できない場合であっても、「ようだ」などの直喩の標識を用いると自然となる。(14)(= (9b, c))も同様である。

(13) a. ??スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形だった。

b. スコットは抵抗する力を失い、もう操り人形みたいだった。

(14) a. もう採用インフラ同然。8割強の就活生が「企業 SNS は必要」

b. 8 番らーめん秋の新作はもうイタリアンのような「クリーミートマト唐麺」！

直喩(シミリ)と隠喩(メタファー)の関係については、いくつかの先行研究がある。鍋島(2008, 2011)は両者を同一の実態とみなし、語用論的分析において区別するのではなく統一的に扱うべきであると主張する。一方、加藤(2018)はコーパス調査と作文実験に基づき、隠喩と直喩が異なる文脈で用いられることを示している。

本稿はこれらの語用論的分析の議論を踏まえつつも、意味論的観点から直喩と隠喩を区別する立場を取る。その根拠の一つが(15)、(16)である。隠喩は「かなり」や「より」といった程度副詞と共起しにくい、直喩は共起可能であるという点である。Kennedy & McNally(2005)によれば、これらの *very* や *more* にあたる副詞は「段階的述語(gradable predicate)」だけを修飾する。したがって、直喩の標識である「ようだ」等は、述語に段階性を付与する文法的要素であると考えられる。

(15) a. ??人生はかなり旅だ。

b. 人生はかなり旅のようだ。

(16) a. ??人生はより旅だ。

b. 人生はより旅のようだ。

以上を踏まえると、「もう」が連辞的隠喩と共起できないのは、連辞的隠喩が段階性を持たないためである。4 節で述べたように、「もう」は尺度構造をもつ句を修飾し、段階の移行を意味する副詞である。そのため、段階性を欠く述語とは「もう」は共起できない。この点は3 節の(11)に示した事例とも一致する。一方で、直喩の述語は段階性を持つため、「もう」と共起可能である。そして、「A はもう B のようだ」という形式は、「A のある側面が [B のようだ] といえる領域に至っている」ことを表す。

一方で、(17) に示すように「もはや」は連辞的隠喩とも直喩とも共起可能である。

(17) a. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形だった。

b. スコットは抵抗する力を失い、もはや操り人形のようにだった。

「もはや」が段階性のない隠喩と共起できるという事実は、関 (2019) の提示する「カテゴリー間の移行」という説明だけでは十分に説明できない。関の言う「移行」は、鍋島 (2011) などが言及する比喻におけるカテゴリー間の写像関係を踏襲していると考えられるが、写像関係はカテゴリー間の対応を示すものであって、カテゴリー間の移行を示すものではない。そのため、「もはや」と隠喩が共起する例を、「カテゴリー間の移行」という記述で捉えることは適切ではない。

むしろ「もはや」の意味の第一義は「その状態にあることを強調する」点にあり、「移行」が見られる場合も、それは「もはや」の意味的制約ではなく文脈に依存する解釈にすぎないとする。比喻にかかわる用法に限らず、「もはや」には「段階の移行」を前提としない例が存在する。その一つが (18) である。(18a) ではワンピースの色が緑から黄色へと漸次的に移行したと解釈するのは不自然であり、そのため「もう」を用いることはできない。しかしながら、「もはや」は使用可能であり、ここではワンピースの色が「(緑ではなく) 黄色である」ことを強調する機能を果たしている。したがって、「もはや」の使用条件として「段階の移行」が必須とはいえない。

(18) a. 緑のワンピースをネットで注文したが、届いて見たらデザインも違うし、色ももはや黄色だった。

b. ??緑のワンピースをネットで注文したが、届いて見たらデザインも違うし、色ももう黄色だった。

さらに、時間にかかわる用法では、この「強調」と文脈的に生じる「移行」とが重なり合うことで、先行研究 (金 2006、박 2018 など) が指摘してきた「現状不可変性」というニュアンスが導かれると考えられる。ただし、本稿の立場を十分に裏づけるには、より広範なデータと精緻な分析が必要である。したがって、時間にかかわる用法を含めた「もはや」の体系的な意味分析を今後の課題とする。

6. おわりに

本稿では、「もう」の比喻にかかわる用法を中心に検討し、その意味を精緻化することを試みた。その結果、直喩と隠喩を区別する観点として、述語の段階性の有無を示したとともに、「もう」は常に「段階の移行」を前提とするという宮田（2025）の主張を裏づけた。また、「もはや」を一貫して「カテゴリー間の移行」として捉えてきた関（2019）の分析を再検討した。その結果、「もはや」の使用には必ずしも段階の移行が必須ではなく、むしろ「強調」という側面に意味の核を求める立場を提示した。

参考文献

- 池田英喜(1999)「「もう」と「まだ」:状態の移行を前提とする2つの副詞」『阪大日本語研究』, 11, 19-35.
- 石神照雄(1978)「時間に関する<程度性副詞>「マダ」と「モウ」—<副成分>設定の一試論—」『国語学研究』, 18, 26-38.
- 加藤祥(2018)「隠喩と直喩の違いは何か:用例に見る隠喩と直喩の使い分けから」,『認知言語学研究』, 3, 1-22.
- 金英兒(2006)「時の副詞の考察:「すでに」・「もう」・「もはや」について」,『日本文化学報』, 28, 77-95.
- 小出慶一(2017)「「もう」はどのようにフィラーになったか:フィラー化の経路とフィラーの機能」,『さいたま言語研究』, 1, 1-11.
- 鍋島弘治朗(2008)「シミリはメタファーか?:語用論的分析」,日本語語用論学会事務局編『日本語語用論学会発表論文集 第4号』, 63-70.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』, くろしお出版.
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版.
- 宮田瑞穂(2025)『日本語の副詞「もう」および「まだ」の研究:時間にかかわる用法から程度にかかわる用法まで』, 博士課程論文, 東京大学(未公刊).
- 関ソラ(2019)『現代日本語におけるカテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察』, 博士課程論文, 名古屋大学.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 山梨正明(1988)『比喻と理解』, 東京大学出版会.
- 박종승(2018)「類義副詞의 意味分析:もう.もはや.すでに.とつくに를 중심으로」,『日本語文学』 55, 71-93.
- Kennedy, C., & McNally, L. (2005). Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language*, 81(2), 345-381.